

—復活されたイエスとの出会い—

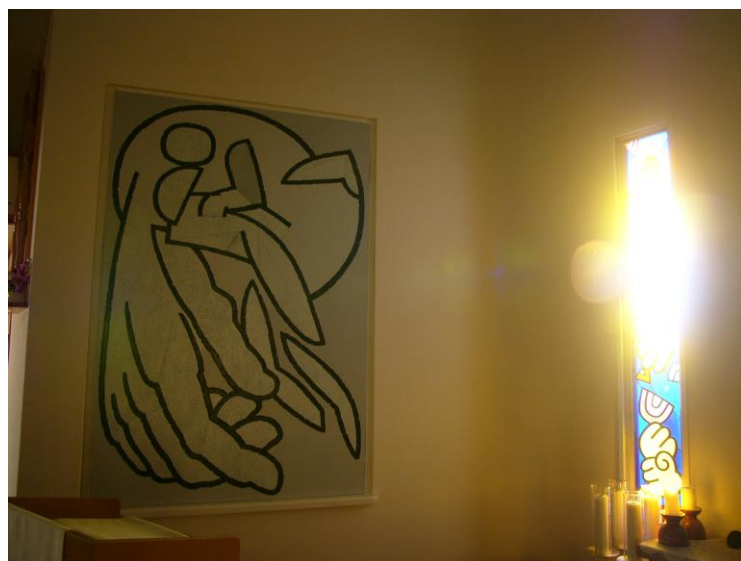


*間もなく(4月13日より)聖週間に入り、復活祭を迎えます。—「聖週間」。その言葉を聞くと、きっとまず頭に浮かんでくるのは、イエスの十字架上の苦しみと死でしょう。

それは当然のことでしょうがただ、どうしてイエスはその悲惨な最期を迎えられたかを考える必要があると思います。—もちろんそれは私たちが罪から救うためでしたが、私たちが救ったのはイエスの激しい苦しみではなく、それを通して示された計り知れない愛なのです。—私たちは、「イエスの後について行くように」とよく呼びかけられるのですがしかし、実際にはそれがイエスと同じように十字架にかけられることを意味しているのではありません。私たちに要求されていることは、エゴ、自分を中心にして考え、行動することを十字架に掛けることです。言い換えれば、私たちに求められることは、イエスと同じような愛を抱き、その愛に生きるということです。—そのことを明白にするためにヨハネは最後の晩さんの席でのイエスの話を次のように書き残しまし

た。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ 15 章 9)「…わたしがあなたがたを愛したように互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ 15 章 12~13)「…互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」(ヨハネ 15 章 17)と。

「わたしの命令」。イエスはめったにこのような言葉を口にしませんでした。それだけにこの言葉には特別な重みがあるとわかります。パウロはその「重み」を次のように表現しています。「全財産を貧しいひとびとのために使い尽くそうとも、誇ろうとして我が身を死に引き渡そうとも、愛がなければ私に何の益もない」と。(コリントの信徒への第一の手紙13 章 3) —



＊愛することにはいくつもの顔がありますが、復活して生きて現れたイエスに目を留めようとすればすぐ、その一つに気づきます。—四つの福音書を読むとわかるように、復活して生きて現れたイエスに出会ったとき、弟子たちは「恐れ」を抱きました。どうして喜びではなく、恐れを感じたのでしょうか。「亡霊を見ているのだ」と思い、弟子たちは恐れおののきました」（ルカ 24 章 37）とルカは書いています。弟子たちの心境を理解するために「亡霊」という言葉は一つの鍵になっているような気がします。—ユダはイエスを引き渡し、ペトロはイエスを否み、他の弟子たちはイエスをおいて逃げてしまいました。死者の中からよみがえったイエスが自分たちを罰したり、報復したりするのではないかと弟子たちは恐れたことが十分に考えられます。いずれにしてもイエスから褒められることを弟子たちは期待していたはずがありません。—ところが生きて現れたイエスは彼らを叱りつけたり、非難したりはせず、起こったことにさえ触れませんでした。弟子たちの心の中にあった恐れは一瞬のうちに大いなる喜びに変わりました。自分たちの卑怯な態度を忘れたかのように、イエスは自分たちを赦していたことを弟子たちは悟りました。「赦された。イエスに対して自分たちは酷いことをしたのに赦されました」。彼らにとってそれは想像できないほどの驚きだったでしょう。復活して生きて現れたイエスとの

出会いは弟子たちにとって、神の赦しとの出会いでした。彼らは一生それを忘れることができませんでした。人はそこまで神に愛され、神は正に愛なる神であることを、弟子たちは人々に宣べ伝えることに、命をかけました。



＊入信の秘跡を受ける 3名の新しい兄弟と共に私たちは「復活の主日」をお迎えしますが、その日を神の赦しとの出会いとするように心がけたいと思います。それに伴って「主の祈り」を唱えるときに、口にする次の言葉を心に留めましょう。「私たちの罪を赦してください。私たちも自分に負い目のある人を赦しますから」と。（ルカ 11 章 4）イエスが身をもって示されたように、赦すことは愛することの最高のしるしです。私たちには人を赦すことはおずかしいことですが、それは人への愛のしるしであり、自分の復活へ導く確実な道であることを新たに自覚しましょう。

～イエスのご復活
おめでとうございます～